

大震災から 13 年 再生した海岸林

運営委員 工藤 義治

平成23年3月の東日本大震災による津波は、皆さんが知るとおり大きな被害を起こした。私は出張で青森にいて、カーナビに映るテレビの映像で地元八戸の津波を知った。震災一週間後に、ようやく八戸市北部の市川町に海岸林の津波被害を見に行くことができた。

実は海岸林としてクロマツを植林する仕事をしており、その現場監督をしていたのだ。震災当日も作業員が仕事をしており、海がどんどん沖に引いていくのを見ていた。

翌年には片付けが終わった所から柵の設置と再度クロマツ植林をすることになった。

この時に紙のポットに黒土を7キロ程度入れて裸苗を入れて植えることになった。当時はあまり分かっていなかったが、塩害による枯損を避けるための処置であった。

実際、その後に石巻の海岸林で見た造成枯損率の低さと成長からも間違いなく、黒土を混ぜるやり方は正しいと思った。

それ以外にも青森県方式なのか、風対策として高さ1mの木柵で20m×5mのセルを作り、カヤス（カヤを縫い込み板状にしたもの）を苗木の前に5分の1砂に差して立たせるというものもあった。砂が乾燥した際に、カヤスが海霧を捕捉して水分を供給する機能に期待した手法であった。その後予算不足でカヤスは杉板になったが、立てずに根元に敷いた方が良いのでは？と

効果を疑問に思う事もあった。こうした手厚い植林方法を用いて、震災後の復旧では最初に海岸林の植林にとりかかった。

今回の記事を書くに当たって、久しぶりに現場を訪れると、とても大きくなっていた。今では、10m近くに成長をしているので、成功事例として誇れるのではないかと思っている。10年以上に渡り、海岸林を造成するに当たって様々な事もあったりしたので、感無量であった。

震災後のことだが、海岸林は津波に役に立たず余計に被害を広げたのではないかと、という発言が増えていた。

その際に私は、前の港から流された漁船が市川地区の海岸林に捕捉された写真を投稿した。後ろには住宅街があり3m以上冠水したが、今も住んでいる方も多し。また、漁船が流されてしまった方も多かったが、市川地区ではすぐに回収出来たので、早くに再開出来た方も多かったのである。

その後、森林総合研究所の調査もあって、多少の評価は得られるようになった。

- ・海岸林は大きな津波には耐えられない
- ・ある程度の幅があれば津波を減衰できる
- ・地下水が高いと根が浅く倒伏しやすい
- ・海水が留まった所は数か月かけて枯れるなどがポイントとなった。

新実践者のもとで勉強会を開催

2021年に選抜した新実践者は、この3年間、自身の里山で苗を育苗し、植えて、里山の再生を実践してきました。そんな経験を積んできた彼らのもとで、希望する同村隣村の村人に対して、3月に育苗の仕方を学ぶ勉強会を開催しました。

経験を村人に還元

総会資料にも載せていますが、地域苗畑主→実践者→新実践者と、地域の人的資源を活用して、自身で樹木を育苗し、植えて、利用できる人材を育ててきました。

今年は、新たな第3のステージとして、経験を積んできた新実践者のもとで、同じ村や隣村の村人へ技術や経験を共有してもらい、苗木作りや樹木の植えて方を学ぶ勉強会を開催しています。3月には雨期の植栽に向けて、苗木作りの勉強会を5カ村で行いました。

とはいえ、経験の浅い新実践者に1から10まで勉強会を任すのは荷が重いと考えて、先輩実践者やマリ人スタッフがサポートをしています。

表 里山再生実践活動の流れ

第1ステージ	第2ステージ	第3ステージ
2015～18年	2021～23年	2024年～
地域苗畑主 ↓ 実践者	実践者 ↓ 新実践者	新実践者 ↓ 村人
研修と実践	実践の助力	勉強会

苗木作りを学ぶ

農耕民である彼らにとって、作物を作ることは日々行っていますが、苗木作りの経験はほとんどの村人は初めてです。特に培土の調合はそれぞれの材料とその割合をしっかりと学んでいました。

堅く締まっていない肥沃な土を用意して、家畜の糞や植物の残渣などを堆積して、

長期間おいて熟成した堆肥を混ぜて、育苗培土を作ります。その次に、その培土を、飲料水の袋をリサイクルして、排水のための穴をあけたポットに適度な硬さで詰めます。ちょうどよい具合で詰めるのが、なかなか難しくもあります。

最後に、樹木の種を播いて、覆土します。樹木の種類によっては、播種前に催芽の処理を行ったりするので、その説明なども丁寧に行っています。



ポットに培土を詰める

女性が多数参加した背景

5カ村で行った勉強会には、全部で58名が参加しました。そのうち19名が女性で、新実践者育成の時にはあまり拾い上げられなかった女性が、凶らずも勉強会では多くの女性に参加してもらうことができました。

参加した女性からは、「この勉強会では、バオバブやヘンナなどの苗木の作り方もすべて、大変興味深かった」と非常に感謝されています。勉強会後のフォローアップでも、女性の何人かは柵で囲った苗畑を作り、

勉強会でつくった苗木をうまく育てているのを確認しています。村から離れた場所に連れ出すのは難しいとしても、同じ村で行う勉強会なら参加しやすかったのでしょう。



女性が多く参加できた勉強会

マリ人スタッフのトラオレは、「ファナ地域では、毎日の日課として、炊事のための薪を採りに、村はずれの灌木林に出かけていき、頭に載せられるだけの薪を運んでいます。そうした灌木林もどんどんバマコの住民たちに分譲されて、ますます薪を採るのが厳しくなっています。今後十年の間に、日々の薪を得るために、チャンガラなどの樹木を植え育てることが必要不可欠な作業となるでしょう。」と話します。

女性たちの中でも、最近苗木配布の時に、食用となるバオバブではなく、材として使えるユーカリを欲しがると人が増えたり、勉強会に多くの女性が参加したということには、こうした背景があると言えます。

勉強会の今後

今回は苗木づくりの勉強会でしたが、今後は樹木の植栽の仕方、管理の仕方などの勉強会も続けて開催します。多くの村人が木を育てる知識や経験を得るための場として勉強会が役立ってくれればと考えていま

す。勉強会と言っても、肩肘張らずにワイワイ、ガヤガヤと同じ村の村人から気軽に教えてもらえる、そんな場になれば良いです。

「この前に播いたユーカリを別のポットにも植えようとしたら枯れてしまったの。どうしたらよいのかしら?」「それはね、こうしたらいいんじゃないかな。」などと日常の会話の中に樹木談議が混じってくれば、樹木の育成も彼らの日常と化すことになるのかもしれない。(榎本肇)

手作りの食害防止柵

近年の学校林の育成には、柵を作るために会が金網を供与して、列状の学校林を育成しています。それ以外にも校庭の真ん中に何本か木を植えたいという要望があります。その時に活躍するのが、一部の村人が作成する手作りの食害防止柵です。

灌木の細い枝を編み込んで作る柵は、非常に丈夫で、何年もの間、苗木を守ってくれます。村人から一個1,000CFA(約250円)で買い取って、学校林の育成に使用しています。



学校林の苗木を守る手作りの食害防止柵

育苗用ポットの話

坂場 光雄

苗木を作る際には苗木用のポットが不可欠である。当初は日本製のヘイコーのポリエチレン袋(120mm×230 mm)を持参して利用した。厚さが薄いタイプだと強い日照の下では劣化して短期間で破れてしまうので、厚いしっかりしたものを使用した。

一箱 3000 枚で 9 kg ほどあったようで、日本から二箱を持っていこうとすると、それだけで飛行機の荷物重量制限に近くなる。そこでポリエチレン袋の一部を機内持ち込みのリュックに入れて持って行ったことがある。

そのうちに、トラオレ氏がバマコの郊外でプラのポットを作っている事業所を見つけてきたので、そこで何万枚かを何十万シェーファーかで購入した。黒い色のポットで、これでポットの件は大丈夫と思っていたら、その事業所がつぶれてしまった。

その後、トラオレ氏がパンの粉袋や水の袋を集めてくれた。パンの粉袋はフランスパン用のドライイーストが入っている丈夫な袋で、容量は 1ℓ よりやや少な目である。水の袋は飲用水が 200ml ほど入っている 12 cm ほどのポリ袋である。

パン屋を回ったり、水の袋を集めている人を回ったりして、購入してくる。水の袋は、飲んだ後にごみとして捨てられたものを集めている人がいる。これをリサイクルしている。

現在の値段を聞いたところ、パンの粉袋は 25CFA(約 6 円)、水の袋は 5CFA(約 1 円) である。ちなみに焼いたフランスパンは 250CFA、水の入った袋は 50CFA で売られている。

集めた袋は整理されているのではなく、乱雑に大きな袋に詰め込んであるので、種類ごとに数を数え、料金を確定して、支払っている。これをトラオレ氏がすべて行っている。

購入した袋はそのまますぐに使えるわけではない。袋の切り口はさまざまである。きれいに切っているものもあるが、大部分は引きちぎったり、斜めに破ったりしているので、ポットとして使えるように、切り口を切りなおし、水抜き穴を切り取って、苗木用のポットになる。バマコの事務所の場合、切りそろえるためにハサミを使用していたが、村の地域苗畑ではヒゲソリ用のカミソリ刃を使っていた。

パンの粉袋は耐久性があるが、水の袋は劣化しやすいので、地域苗畑主は苦労があるようだ。もっと買い上げてやりたいが、予算と時間に縛られる。

水袋とパン袋のポット



地域苗畑のポット



トラオレの学校林作業日誌 (2024年1月~3月)

■ウェレケラ小学校

学校管理委員会の管理が行き届いている。根が浮き上がっている箇所を埋め戻した。



■タンバブゲー小学校

水やりが足りないが、以前植えたカイセドラとニームの生育は良い。支柱を補強した。



■マナコロ小学校

幸い家畜の食害を受けずに成長している。シロアリに食われた支柱を交換した。



■カラバン小学校

校長と水やりについて話し合った。家畜の食害を受けた苗木 20 本を補植した。



■グンドゥ小学校

生徒たちの水やりで苗木の活着は良好。枯れてしまった 22 本を植えなおした。



■ラミニブゲー小学校

金網を移動し、延長したユーカリ列植も大きく育っている。



総会報告 サヘルの森の会員総会が開催されました

3月17日（日）、サヘルの森通常総会を新宿区市ヶ谷にある「JICA地球ひろば」の一室をお借りして開催しました。

出席者は、運営委員等を含めて15名でした。また、総会資料に同封したハガキの返信も15名の会員から頂戴しました。

総会に先立って、事務局長の榎本肇から現地活動報告がありました。

総会では、事前に配布した資料に沿って報告と計画の発表があり、いずれの議案も拍手により承認されました。

◆サヘルの森会員総会

【第1部】

- ・現地活動報告（報告：榎本肇）
実践者・新実践者の活動状況

【第2部】

- ・会員総会（議長：高津佳史）
2023年度活動報告
2024年度現地活動計画
国内活動報告（2023）・計画（2024）
2023年度決算報告
2024年度予算（案）
監査報告書

◆返信ハガキの内容

多かったのは、昨年12月にお亡くなりになった元代表・小島通雅さんへの思いをつづったものでした。

活動への応援メッセージと合わせて、一部ですがご紹介します。

・小島先生の訃報に接し、ご冥福をお祈り致します。1989年5月にご一緒にティンナイシャまで行った思い出は、私の人生の1ページとして大切なものです。

・小島通雅さんに心からの哀悼と感謝を捧げます。本当に「ありがとうございますでした。」

・「小島先生の思い出」なつかしく読ませて頂きました。常にボトムアップを語っていた先生にたくさんの事を学ばせて頂きました。若者達が議論するのを嬉しそうに見ながらお茶の用意を下さっている姿が目には浮かびます。

・いつもお会いしていないので、今でもアフリカ、日本（関東）にいらっしゃる？そう考えていないと悲しくなります。

・「小島通雅様の思い出」拝読し感銘を受けました。「里山再生の実践の成果」では技術を伝え目に見える形になるまでの皆様のご尽力に感謝しております。

・サヘルの地域はなかなか平和になりませんね。いつまで人間の争いが続くのでしょうか。ウクライナ、パレスチナ、世界に平和が訪れますよう祈る一日一日です。

・学校林が子供たちの安全な生活を守る役割を担っていること等、微力ですが一会員として今後も会を支えて参りたいと思います。

・地道な活動がとても大切だと思っています。マリの人々が自立していつている様子、とても頼もしく思います。

浦島丘中学校 資源回収委託式

横浜市立浦島丘中学校の資源回収委託式に出席しました。(榎本 肇)

■牛乳パック回収

2/27 (火) に浦島丘中学校の生徒さんが回収した牛乳パックを受け取り、古紙業者の山田洋治商店さんに持ち込みました。昨年の回収量は 390 kg となり、6,006 円で買い上げていただきました。

去年は、生徒会だけでなく、各クラスに福祉委員を設置して回収に力を入れた甲斐があつて 190 kg も回収量が増えました。今年もトップのクラスは表彰されるというコンクールがされるそうです。

■資源回収委託式

4/30 (火) に学校主催の資源回収委託式に出席し、生徒さんにマリでの現地活動について報告しました。アルミ缶の回収金 23,375 円も委託されました。この回収量も昨年の 2.5 倍に増加しています。

委託式では、毎年話す内容を変えてほしいとのことで、クイズ形式で回答しながら学ぶようにしました。生徒たちの反応も良く、少し手ごたえを感じました。

後日、福祉委員の生徒さんたちから、委託式の感想文を送っていただきました。今年も生徒たちの奮闘が楽しみです、

◆福祉委員 2 年目です。なぜ 2 年も入ったかという、砂漠が広がっていること、何故活動しているのかを聞き、環境に何かできることがないかと思ったからです (2 年)

◆クイズも文章も工夫されていて楽しかったし、分かりやすかったです。今回の話のおかげで、いろんな人が協力を自らしてくれました (2 年)

定例活動(1 月～5 月)

会員交流や植物観察などを目的に、毎月第 3 土曜日(一部日曜日)に前代表の坂場さんと散策する「ぶらさかば」を行っています。

散策の様子は、ホームページのスタッフブログに掲載中ですのでご覧ください。

- 1/20 荏原七福神
*寒空の下、大井町駅から西小山駅まで荏原七福神を訪ねて、神社・寺院を巡りました。
- 2/18 善福寺川をさかのぼる
*早春の善福寺川を訪ねました。和田堀公園などでウメと早咲きのカワヅザクラの花を楽しみました。
- 4/21 穴守稲荷駅から大森駅を歩く
*空港に近い穴守稲荷駅から大森駅まで、東京湾岸を歩きました。穴守稲荷、羽田クロノゲート、森ヶ崎公園、海浜公園、大森海苔のふるさと館、平和の森公園などを訪ねました。
- 5/18 東村山の八国山を歩く
*東村山駅から多摩湖駅まで、初夏の狭山丘陵を歩きました。ふるさと歴史館、八国山緑地、トトロの森を経て村山貯水池(多摩湖)などを訪ねました。



浦島丘中生徒会の皆さんと

写真展を開催しました

サヘル・森千葉支部の主催で、写真展を開催しました。

運営委員の上田隆さんが2008年に撮影したマリ共和国 GOSSI 村の風景写真を、「JICA プラザよこはま」の2階回廊展示スペースをお借りして展示しました。

砂漠の国とは思えないゴッシの湖の景観や村の暮らしを切り取った写真25点を回廊壁面に掲示しました。

ボゴラン（泥染め布）、バオバブの実、岩塩、マリの絵葉書などマリグッズも写真の下のスペースに展示しました。

9月に市ヶ谷の「JICA 地球ひろば」をお借りして行った写真展と同じ内容でしたが、1月26日（金）から3月29日（金）まで3か月間の長期開催となりました。

展示の機会をいただいた「JICA プラザよこはま」の担当者も元協力隊員とのことで、アフリカ語で盛り上がりました。改めてご協力に感謝申し上げます。



展示会場の様子

七夕募金のお願い

世界各地で頻発する戦争・紛争の終息と平穏な日常の再開を願って「七夕募金」へのご協力をお願いします。

マリ国内でもイスラム過激派による襲撃事件の報道が見られますが、そんな中でも現地スタッフ中心に活動中です。

現地報告にあるように、新実践者とスタッフが村人に技術を伝える勉強会が開かれています。村だと女性の参加もできます。人材育成の成果が、ようやく目に見える形になってきました。

振込用紙ご記入時のお願い

会費やご寄付でお振込み頂く際、振込用紙に領収書の要・不要を必ずご記入ください。

尚、サヘル・森は寄付等による所得控除の対象になりません。

ご協力のほど、よろしく申し上げます。

会費納入にご協力ください

NPO 法人『サヘル・森』はサハラ砂漠の南縁サヘル地域において植林活動を行う市民団体です。会員には機関誌『サヘル』が届きます。お申し込みは、郵便振替で下記の口座に会費をお振込みください。

- ・一般会員 年 5,000 円
- ・維持会員 年 20,000 円

特定非営利活動法人 サヘル・森

住所：〒194-0013

東京都町田市原町田 1-2-3-403

TEL：042-721-1601（留守電対応）

郵便振替口座：00170-6-115054

HP：<http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/>

BLOG：<http://sahelnomor.exblog.jp/>

E-mail：sahel-no-mori@jca.apc.org

機関誌『サヘル』No. 114 2024年6月30日発行

発行人／編集：高津佳史
